

【2】その他の「半座を分かつ」伝承

[0] 帝釈天とかかわりのない「半座を分かつ」伝承もある。以下にこれを紹介する。

[1] もっともよく知られているものとして『妙法蓮華經』「見寶塔品」に見られる宝塔中の多宝如来が釈迦牟尼仏に半座を分かちて二仏が共坐したというものがある⁽¹⁾。

(1) *Saddharmapuṇḍarīka* (南条・ケルン本 p.249) ; *atha khalu bhagavān prabhūtaratnas tathāgato 'rhan samyaksambuddho bhagavataḥ śākyamunes tathāgatasārhatāḥ samyak-sambuddhasya tasminn eva siṃhāsane 'rdhāsanaṃ adāsīt tasyaiva mahāratnatūpābhyaṅtara evaṃ ca vadati, ihaiva bhagavān śākyamunis tathāgato niṣīdatu, atha khalu bhagavān śākyamunis tathāgatas tasminn ardhāsane niśāsāda tenaiva tathāgatena sārddham.....*

その時、世尊・多宝 (Prabhūtaratna) 如来・応供・正等覚者は、世尊・釈迦牟尼如来・応供・正等覚者にその獅子座の座席の半分 (ardhāsana) を提供して、彼に巨大な宝塔の中で、このように言った。「世尊・シャーキヤ・ムニ如来はここにお坐りください」と。そこで世尊・釈迦牟尼如来は、かの如来と一緒に、その座席の半分に坐った。

『妙法蓮華經』 (大正 09 p.033 下) ; 爾時多寶佛於寶塔中分半座與釋迦牟尼佛。而作是言。釋迦牟尼佛、可就此座。即時釋迦牟尼佛入其塔中、坐其半座結加趺坐。

『正法華經』 (大正 09 p.104 上) ; 時多寶佛則以半座與釋迦文、七寶寺中有聲出曰。釋迦文佛、願坐此床。釋迦文佛輒如其言。時二如來共同一處。

『添品妙法蓮華經』 (大正 09 p.168 上) ; 爾時多寶佛於寶塔中分半座與釋迦牟尼佛。而作是言。釋迦牟尼佛、可就此座。即時釋迦牟尼佛入其塔中、坐其半座結加趺坐。

その他、これに関連する記事として以下のものが見出される。

『思惟略要法』 (大正 15 p.300 中) 正憶念法華經者、當念釋迦牟尼佛於耆闍崛山與多寶佛在七寶塔共坐。

『就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』 (大正 19 p.595 中) ; 當中内院畫八葉蓮華。於華胎上置牽觀波塔。於其塔中、畫釋迦牟尼如來多寶如來同座而坐。

(大正 19 p.597 下) ; 釋迦牟尼如來及多寶佛。於其塔中同座而坐。

『法華曼荼羅威儀形色法經』 (大正 19 p.602 中) ; 爾時塔中師子座上、釋迦多寶兩足聖尊半跏半座、而各同坐。

[2] その他、『仏本行集經』 (大正 03 p.757 上) には釈尊がまだ菩薩であった時にその下で修行をしたアーラーラ・カーラーマが、菩薩に「半座」を分与して弟子たちを2人で教導することを申し出たとある⁽¹⁾。

(1) 『仏本行集經』 (大正 03 p.757 上) ; 瞿曇今可共我同心。我等二人領此大衆、教化顯示。是時羅邏、雖名為師、但取菩薩平等行分。自以半座、分與菩薩、供養菩薩。

[3] また『賢愚經』「優波鞠提品」 (大正 04 p.443 上) には優波鞠提 (ウバグプタ) の説法を聞いていた狗が命終して第六天に生まれ、魔波旬 (他化自在天) と共に一床に坐したとある⁽¹⁾。

(1) 『賢愚經』 (大正 04 p.443 上) ; 有一狗子日日於耳竊爲説法。其狗命終、生第六天與魔波旬共坐一床。魔王思惟。此天大徳、乃與我等。

[4] *Mahābhārata* においてアルジュナが帝釈天から半座を提供されたことはすでに見たが、(5.58) においてアルジュナはクリシュナとも座を共有している。

[4-1] クリシュナとアルジュナに会ってきたサンジャヤが、ドリタラーシュトラにその様子を語る中に次のようである。

黄金の大きな座席に2人の勇士が坐っていた(第6偈)。クリシュナの両足がアルジュナの両膝にのせられていた……(第7偈)。……背の高い2人の若者が一つの座席に坐っているのを見た(第10偈) (1)。

[4-2] このサンジャヤのドリタラーシュトラへの報告は *Mahābhārata* の冒頭にある全体の要約を語る部分で、「翌日にサンジャヤは諸王の集会において、主君にヴァースデーヴァ(クリシュナ)とアルジュナの一体なること (*ekātmya*) を語った」(1.2.144) (2) とまとめられている。第5巻のサンジャヤの報告はかなり長文であるので(第46-68章上村勝彦訳『マハーバーラタ5』pp.172-227)、どの部分が「クリシュナとアルジュナの一体なる」ことを語っているのか明確ではないが、恐らくは上記のアルジュナとクリシュナが一つ座に坐っている場面が2人の「一体なること」を述べているのであろう。

(1) 原文は以下の通り。

naikaratnavicitraṃ tu kāñcanaṃ mahad āsanam /
vidhāstaraṇāstīrṇaṃ yatrāsātām ariṇdamau // 6 //

多くの宝石で色とりどりの黄金の大きな座が種々の敷物をかけられてあり、そこに敵を制する2人(アルジュナとクリシュナ)が坐っていた。

arjunotsaṅgagau pādaḥ keśavasyopalakṣaye /
arjunasya ca kṛṣṇāyāṃ satyāyāṃ ca mahātmanaḥ // 7 //

アルジュナの両膝にクリシュナの両足がのっているのを私(サンジャヤ)は見た。(以下、意味不明。)

śyāmau bhṛhantau taruṇau śālaskandhāv ivodgatau /
ekāsanagatau dṛṣṭvā bhayaṃ māṃ mahad āviśat // 10 //

肌が黒く、大きくて、シャラ樹の幹のように背の高い2人の若者が一つ座に坐っているのを見て私に大きな恐怖が入り込んだ。

(2) 原文は以下の通り。

prabhāte rājasamitau saṃjāyo yatra cābhibhoḥ /
ekātmyaṃ vāsudevasya proktavān arjunasya ca // 144 //